

小学校 学級経営

規範意識の低さが起因となる学級崩壊の予防についての研究
—モラルスキルトレーニングを活用したプログラムの実践を通して—

教育相談課 研究員 皆川 智希

要 旨

小学校高学年において、規範意識の低さが起因となる学級崩壊を予防するために、モラルスキルトレーニングを活用したプログラムを実施し、その効果を検証した。その結果、「社会的責任目標尺度」「授業に関する規範意識尺度」「学級の健康度」「学級満足度尺度」それぞれにおいて有意差が認められた。今回のプログラムによって、規範意識を向上させることが、学級崩壊を未然に防ぐための一つの手立てとして有効であることが示唆された。

キーワード：小学校高学年 学級崩壊 規範意識 モラルスキルトレーニング

I 主題設定の理由

文部科学白書（2007）によると、児童の心の成長にかかわる現状について「いわゆる小1プロブレムや学級崩壊などに見られるような自制心や規範意識の低下」を問題点の一つとして挙げている。

学級崩壊が全国で注目されるようになったのは、1990年代半ば以降のことである。それから10年以上の年月が経過しているが、現在でも各学校においては、「授業が成立しない」「教師の指示が通らない」などの問題があり、校内研修や生徒指導の情報交換などで解決に向けての話し合いがなされている。そのような状況を考えると、学級崩壊は決して解決されておらず、深刻な課題として存在しているといえる。

2000年、事例調査として文部科学省から調査研究を委嘱された学級経営研究会により「学級経営の充実に関する調査研究」の最終報告が出されている。その中では、いわゆる学級崩壊を、「学級がうまく機能しない状況」と呼び、「児童が教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しない学級の状態が一定以上継続し、学級担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合」と定義している。さらにその状態にある150の事例を10のケースに類型化している。その結果、ほとんどの事例において、複数の要因が当てはまることが判明しており、それらの要因は、どの学級にも内在するものであり、学級崩壊はどの学級にも起こる可能性を持つ問題であると考えられる。

さらに、埼玉県教育委員会が実施した「学級がうまく機能しない状況」に関する調査結果（2008）によると、学級がうまく機能しない状況に至った要因は、様々なものが複雑に絡み合うことが多いが、中でも「自己中心的な言動をする子どもがいた」「家庭の養育やしつけに問題があった」といった要因を挙げている学校が多くあったと報告されている。これらの要因は、児童の規範意識に深くかかわるものであると考える。

そこで、児童の規範意識にかかわる各種調査に目を向けると、例えば、内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査」（2007）では、小学校4年生から小学校6年生で、「授業中、勝手に席を離れる」「先生にさからったり口答えをしたりする」などの質問に対して、「よくある」「ときどきある」と答えた児童は、1999年に行われている同調査と比較して増加しているとの結果が出ている。さらに、河村（2008）のデータによると、「先生の言うことは聞かなければならない」という質問に対して、「とてもそう思う」と答えた児童は、49%と半分を切っている。教師が規範を説こうにも、それを聞く耳を持たない児童が多くいる状況である。このような各種調査の結果から、児童の規範意識の低下は明らかで、学級崩壊の一要因になっており、改善に取り組むべき重要な課題であるといえる。

堀越（1996）は、「子どもたちの規範意識は、家庭、学校、地域社会において培われていく。その中で、家庭や地域社会の教育力が低下してきている現在、子どもたちが多くの時間を過ごし、意図的・計画的に指導が行われる学校の果たす役割は大きいといえる。」と記している。規範意識を形成するためには、学校生活における具体的な規範の価値や意義を理解させ、規範に則った行為を体験させることによって、自ら正しい行為を遂行できる能力を身に付けさせることが必要であると考えられる。

そこで、本研究では、特に学校生活における規範意識の向上を図ることをねらいとしたモラルスキルトレーニング・プログラムを実践することが、学級崩壊の予防に有効であることを検証していきたい。

II 研究目標

小学校高学年において、規範意識の低さが起因となる学級崩壊を予防するためには、モラルスキルトレーニング・プログラムを実施することが有効であることを、実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

小学校高学年の児童に対し、モラルスキルトレーニング・プログラムを実施し、規範意識を高めることで、学級崩壊を未然に防ぐことができるであろう。

IV 研究の実際とその考察

1 規範意識について

文部科学省は、「児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料」（2006）において、「規範」を「人間が行動したり判断したりするときに従うべき価値判断の基準」とし、「規範意識」を「そのような規範を守りそれに基づいて判断したり行動しようとする意識」としている。規範意識の高低は、規範に対する価値が内面化され、正しい価値判断のもとに行動ができるかどうかで判別されるといえる。

中谷（2006）は、規範の教授について「規範について外から強制的に、権威的に教授するのではなく、その規範の持つ意味を教え、必要性を説明することが、児童の自発的な規範意識を高める教育効果をもつ」と記している。学校教育においては、道徳だけでなく全教育活動の様々な場面で、規範の意味や必要性を理解させ、規範に則った行為を体験させることによって、自ら正しい行為を実践できる能力を育成していくことが求められている。児童は、そうして身に付けた能力を学校生活や社会生活の場で実践していくことで、多くの知識や経験を得、また多くの人とのよりよい人間関係づくりができると考える。逆に、規範意識が低いことでの弊害は多い。いじめや問題行動、他者とのトラブル、中でも学級全体の問題として挙げられるのが学級崩壊といえよう。

小松（2003）は、「小学校における学級の機能変容と再生過程に関する総合的研究」の中で、「規範意識の形成がなければ、学級経営は困難なものになるであろう。」と述べている。規範意識の向上は、児童一人ひとりの人格形成のみならず、よりよい学級経営をしていく上でも必要不可欠なものである。本研究では、規範意識の低さが起因となる学級崩壊の予防の研究であることを踏まえ、特に学校での生活や学習にかかわる規範に焦点を当て、研究を進めた。

2 モラルスキルトレーニングについて

林（2008）は、「道徳の時間には正しい答えを出せるのに、実際の場面では具体的な行動の仕方がわからず、道徳的な行動のできない子どもたちがいる。彼らには、具体的な行動の仕方をスキルとして教えることが必要である。」として、モラルスキルトレーニングを提唱している。モラルスキルトレーニングとは、道徳的な善悪の判断を児童自らがし、正しい行いを実践できるようにするためのスキルを身に付けることをねらいとしており、実践に当たっては、①具体的な行動の指導になっているということ、②道徳教育になっていること、の2点を必要な条件としている。

本研究では、上記をふまえ、学校生活の中で児童がよく経験すると思われる道徳的な判断が求められる場面を想定し、資料として活用した。そして児童がこれまでの経験の中で、悪いと思っただけで済まなかったことや注意できなかったことを振り返り、その場に合ったよりよい行動の仕方を確認した。さらに、ロールプレイングやシェアリングの活動を通して、スキルを身に付けさせた。その際、型どおりのものではなく、規範に則った範囲の中で、児童自身が考えた言葉や動きでロールプレイングができるように配慮した。これからの生活に生かしていくには他者の言動をそのまま使うのではなく、自分で考えた望ましい言動こそが必要とされると考えたからである。このような活動を通して、道徳的な実践力を高めるとともに規範意識の向上を図った。

本研究では、モラルスキルトレーニングを扱う時間は、次のような流れで授業を進めた。

過程	場面	学習内容
導入	ウォーミングアップ	ミニゲームや構成的グループ・エンカウンターのショートエクササイズを行う。
展開後半	資料の提示	道徳的な判断が求められる場面を読み取り，問題点を把握する。望ましい行動の仕方を確認する。
	ロールプレイング 1	教師と代表児童で資料場面を演じる。
	シェアリング 1	ロールプレイング 1 の感想などを言い合って，良い点・改善が必要な点を確認する。
展開後半	メンタルリハーサル	シェアリング 1 をもとに自分ならどう対応するかを考え，頭の中でロールプレイングを行う。
	ロールプレイング 2	児童同士でロールプレイングをする。
	シェアリング 2	互いのロールプレイングについて感想を伝えあう。
まとめ	振り返りカードに記入	本時の学習を通して，今までの自分を振り返り，これからどのように生活に役立てていくかを考える。

3 検証尺度について

本プログラムの効果を検証するために，社会的責任目標尺度，学級の健康度，授業に関する規範意識尺度，Q-Uの学級満足度尺度の4つの尺度を使用し，プログラム実施前後に調査を行った。

(1) 社会的責任目標尺度

中谷（1996）の作成したこの尺度は，「教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り，規範に従おうとする目標」である規範遵守目標と「社会的，対人的な協力や援助をしようとする目標」である向社会的目標の2つの下位尺度からなる。合わせて18項目からなり，5件法で回答を求めるものである。各項目の回答に5～1点を与えている。本研究では，児童の学級での学習や生活における規範意識の変容を見るために使用した。

(2) 学級の健康度

小松（2003）は，「小学校における学級の機能変容と再生過程に関する総合的研究」の中で，「授業がうまく機能しない状況」の具体的な様子を読み解く指標として，表1にある4つの特徴的な行動を取り上げている。それらを用いて児童から見た授業の様子をアンケートで回答を求め，点数化して「学級の健康度」という尺度を用いて分析をしている。回答は，4件法からなり，各項目ごとに得点化をしている。本研究では，授業がうまく機能している状況かどうかを判断するとともに，その変容を見るために使用した。

表1 「学級の健康度」判断のための得点化基準

項目	とても多い	やや多い	かなり少ない	全くない
授業中に立ち歩く人がいる	7点	5点	3点	1点
授業の時間になっても教室に入らない人がいる	8点	6点	3点	1点
授業中におしゃべりをしたり，手紙を回したりする人がいる	4点	3点	2点	1点
授業中，先生をこまらせても平気な人がいる	7点	5点	2点	1点

「学級の健康度」は，全児童の点数を合計し平均を算出する。表2は，「学級の健康度」の分類である。学級の平均値が低いほど「授業がうまく機能している状況」である。

表2 「学級の健康度」の分類

	「学級の健康度」
10点未満	とてもうまくいっている
10点～13点未満	うまくいっている
13点以上	あまりうまくいっていない

(3) 授業に関する規範意識尺度

小松は，同研究の中で，「授業に関する規範意識」についても尺度化している。表3にある4つの項目について，アンケートで回答を求め，点数化して「授業に関する規範意識尺度」を用いて分析をしている。回答は，4件法からなり，各項目ごとに得点化をしている。本研究では，授業における規範意識の変容を見るために使用した。

表3 「授業に関する規範意識」の得点化基準

項目	とても思う	少し思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
授業中に立ち歩くことは悪いことだと思う	1点	2点	3点	4点
授業の時間になっても教室に入らないのは悪いことだと思う	1点	2点	3点	4点
授業中に授業と関係のないことをするのは悪いことだと思う	1点	2点	3点	4点
先生をこまらせることは悪いことだと思う	1点	2点	3点	4点

表4 「授業に関する規範意識」児童個人の分類

合計点	分類
4点	授業に関する規範意識－高群
5～7点	授業に関する規範意識－中群
8点以上	授業に関する規範意識－低群

表5 「授業に関する規範意識」学級平均の分類

学級平均	分類
4点以上5点未満	授業に関する規範意識－高群
5点以上6点未満	授業に関する規範意識－中群
6点以上	授業に関する規範意識－低群

表4は、児童個人の「授業に関する規範意識」の得点の分類表である。高群に属する児童は、4つの項目すべてに「とても思う」と回答した児童である。

表5は、学級ごとの「授業に関する規範意識」の分類表である。児童個人の「授業に関する規範意識」の得点を合計し、学級平均を算出したものである。

(4) Q-Uの学級満足度尺度

河村が作成した、「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」は、児童の学級生活での満足感と意欲、学級集団の状態を質問紙によって測定するものである。本研究では、このうち学級満足度尺度「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」を使用し、児童個々の学級生活における満足感や学級集団の状態を把握し、その変容を分析した。

4 モラルスキルトレーニングを活用したプログラムの実践

(1) 実施時期と対象

- ア 実施時期 : 平成21年8月24日～9月18日
- イ 対象 : 協力学級6年生 37名(男17名, 女20名)
- ウ 授業者 : 研究員 皆川 智希
- エ 実施場所 : 教室・視聴覚室
- オ 指導時間 : 道徳の時間及び学級活動

(2) 児童の実態把握(事前調査の結果から)

事前調査及び協力学級の担任からの聞き取りから、以下のような児童の実態を把握した。

「社会的責任目標尺度」の調査の結果、総得点平均4.47点、下位尺度「規範遵守目標」平均4.48点、「向社会的目標」平均4.46点で、規範意識や他者への協力や援助の意識が高いことが分かった。しかし、項目ごとにみると、「友達としゃべりたくなかったときも、授業中はがまんするようにします」の項目が平均4.05点、「人の悪口を言わないようにします」の項目が平均4.30点と他の項目と比較して低い値を示した。どちらもよくないことだとわかっているにもかかわらず、実際はしてしまったり、まわりに同調してしまったりする傾向がみられた。

「学級の健康度」の調査の結果、「学級の健康度」は、9.68点となり、「とてもうまくいっている状況」であった(表2)。しかし、「授業中におしゃべりをしたり、手紙を回したりする人がいる」という項目については、「全くない」と答えた児童は6名しかおらず、学級の中には規範に則った行動ができていない児童が存在することが分かった。

「授業に関する規範意識尺度」の調査の結果、学級平均は、5.08点で中群に属していた(表5)。個人の分類では、約半数の児童が高群に属していた。中群・低群に属する児童の意識の向上を図る必要がある。

「学級満足度尺度」の調査の結果、児童数37名中、学級生活満足群26名(70%)、非承認群6名(16%)、侵害行為認知群2名(6%)、学級生活不満足群3名(8%)という状態であった。70%の児童が学級生活に満足していることから、概ね、親和的な学級集団に属しており、学級崩壊の兆候はみられなかった。しかしながら、男子だけを見ると、17名中8名が学級生活満足群以外に属していた。

学級担任から見た児童の課題として、「全体的におとなしく、進んで発表することが苦手である」「指示待ちで、自分で考え進んで行動することが苦手である」「特に男子は、幼く人に流される傾向がある」ということが挙げられた。

(3) プログラムの実践

事前調査の結果から、本実践では、規範意識の低い項目の向上を目指し、「話の聞き方」「人への悪口」「きまりを守ること」についてのプログラムを取り入れた。また、規範意識の低い項目だけでなく、「人のために働くこと」「人に優しくすること」についても、よりよい学級を目指すために必要な要素であり、学級崩壊の予防に効果があるのではないかと考えプログラムに取り入れた。

プログラムの構成は以下の通りである。

回	プログラム名	ねらい	目標とするスキル
1	「話の聞き方名人になろう」	モラル スキルの 習得	話の聞き方のスキル
2	「かげ口や悪口をなくそう」		正しい行動を自己主張するスキル 他者の望ましくない行動に対し注意を促すスキル
3	「大切にしよう 働く心」		
4	「きまりを守る強い心を持とう」		
5	「親切っていいな」		
6	「いじめについて考えよう」	一般化	
7	「楽しい学級にするために」		
8	「ふれあいまつりを成功させよう」		

5 事前調査・事後調査における平均値の分析（t検定）の結果とその考察

「社会的責任目標尺度」「授業に関する規範意識尺度」「学級の健康度」「学級満足度尺度」の事前・事後調査における平均点の差が有意なものであるか確かめるため、1%水準で両側のt検定をおこなった。下の表は、それぞれのt検定の結果である。

(1) 社会的責任目標尺度について

表6は、社会的責任目標尺度の総得点の平均値を示したものである。この結果、事前・事後の平均の差は有意であった（両側検定： $t(36) = -4.88$, $p < .01$ ）。また、下位尺度「向社会的目標」（両側検定： $t(36) = -4.06$, $p < .01$ ）、「規範遵守目標」（両側検定： $t(36) = -4.99$, $p < .01$ ）においても有意差が見られた。以上の結果から、プログラムを実施したことで事前調査時よりもさらに、社会的、対人的に協力や援助をしようとする意識や集団の規範を守りながら生活しようとする意識が高まったと考えられる。これはモラルスキルトレーニングを実施し、道徳的な判断を必要とされる場面で望ましい言動をできるようにするためのスキルを身に付けたことで、規範意識が向上したと推察される。特に、「授業中の私語」や「人への悪口」など事前調査の中では比較的意識の低かった項目について、「話の聞き方のスキル」「正しい行動を自己主張するスキル」「他者の望ましくない行動に対し注意をうながすスキル」を取り入れたプログラムを実施したことが効果的であったと思われる。

表6 社会的責任目標尺度の得点変化

	人数	事前	事後	標準偏差	t値	自由度	有意差
社会的責任目標	37	80.51	88.16	9.54	-4.88	36	**
向社会的目標	37	35.70	38.70	4.49	-4.06	36	**
規範遵守目標	37	44.81	49.46	5.67	-4.99	36	**

(判定「**」は $p < .01$ で有意である。)

(2) 授業に関する規範意識尺度について

表7は、授業に関する規範意識尺度の総得点の平均値を示したものである。この結果、事前・事後の平均の差は有意であった（両側検定： $t(36) = 4.74$, $p < .01$ ）。学級としては、中群から高群へと移行した。事前調査で高群に所属していた児童は持続し、中群に属していた児童16名中11名が高群へ、低群に属していた児童3名が中群へとそれぞれ向上するなど、中群及び低群に属している児童の意識の変容が見られた（図1）。

特に、学級崩壊の様子（再現ビデオ）を用いて、その劣悪さや悲惨さを理解させ、よりよい学級にするために自分たちができることを考えさせる授業を実施したことで、きまりを守り、よりよい態度で授業を受けることの大切さを再確認できたものと思われる。

表7 授業に関する規範意識尺度の得点変化

	人数	事前	事後	標準偏差	t値	自由度	有意差
授業に関する規範意識	37	5.08	4.22	1.11	4.74	36	**

(判定「**」は $p < .01$ で有意である。)

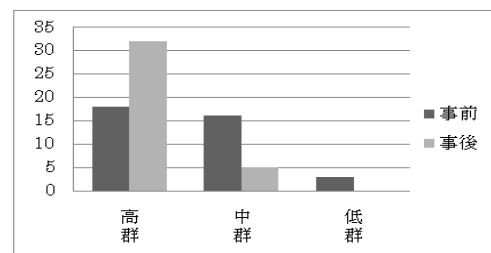


図1 授業に関する規範意識 事前・事後の人数変化

(3) 学級の健康度について

表8は、学級の健康度の平均値を示したものである。この結果、事前・事後の平均の差は有意であった（両側検定： $t(36)=5.89, p<.01$ ）。学級として、事前調査時よりも授業がさらに「とてもうまくいっている」状況になっているといえる。これは、規範に反する行為を目にしたときの注意の仕方を身に付けさせたことで、児童個々の規範意識の向上とともに、児童が主体となってよりよい学級にしようという意識が高まったのではないかと考える。

表8 学級の健康度の得点変化

	人数	事前	事後	標準偏差	t値	自由度	有意差
学級の健康度	37	9.68	6.38	3.41	5.89	36	**

(判定「**」は $p<.01$ で有意である。)

(4) 学級満足度尺度について

表9は、学級満足度尺度の平均値を示したものである。この結果、下位尺度「承認得点」（両側検定： $t(36)=-7.15, p<.01$ ）、「被侵害得点」（両側検定： $t(36)=2.97, p<.01$ ）の両方において平均の差は有意であった。また、下の、図2・3は学級満足度尺度の事前・事後の分布状況を示したものである。

表9 学級満足度尺度の得点変化

	人数	事前	事後	標準偏差	t値	自由度	有意差
承認得点	37	18.22	20.70	2.12	-7.15	36	**
男子	17	16.59	19.35	2.41	-4.73	16	**
女子	20	19.60	21.85	1.86	-5.41	19	**
被侵害得点	37	9.27	8.03	2.97	2.97	36	**
男子	17	10.53	8.82	2.02	3.48	16	**
女子	20	8.20	7.35	2.91	1.31	19	n.s.

(判定「**」は $p<.01$ で有意である。判定「n.s.」は $10<p$ で有意でない。)

「学級満足度尺度」においては、「承認得点」が向上していることから、事前調査時より教師からも他の児童からも認められていると感じている児童が増えていることが伺える。特に、学級生活満足群以外に属していた男子においては、8名中4名が学級生活満足群へと移行し、著しい向上が見られた（図4）。プログラムの中で、ロールプレイングを通して自分の考えを出し合ったり、互いの考えの良さを見つけたりする活動をしたことがその要因の一つであると考えられる。また、「被侵害得点」の向上は、「かげ口や悪口をなくそう」「いじめについて考えよう」といったプログラムを実施したことで、児童にとって学級がルールが確立し、それが守られる安心できる場所になったのではないかと考える。「学級満足度尺度」の結果の分布状況を見ると、約86%の児童が学級生活満足群に属しており、事前調査時よりも、さらに親和的な人間関係のある学級へと変容し、学級崩壊の兆候は見られない状態であるといえる（図2・3）。

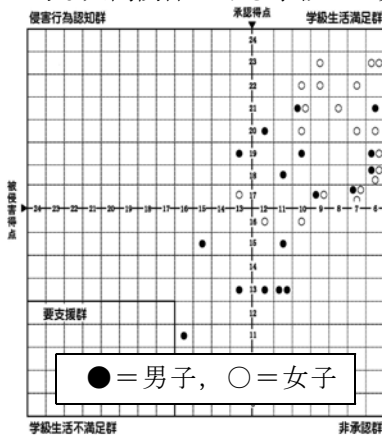


図2 プロット図 (事前)

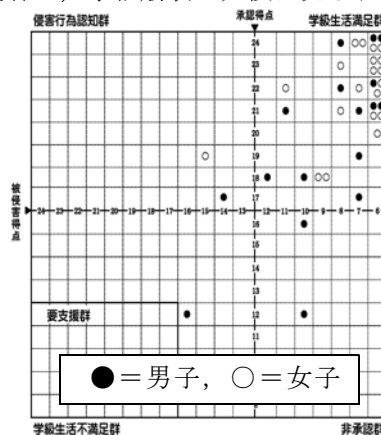


図3 プロット図 (事後)

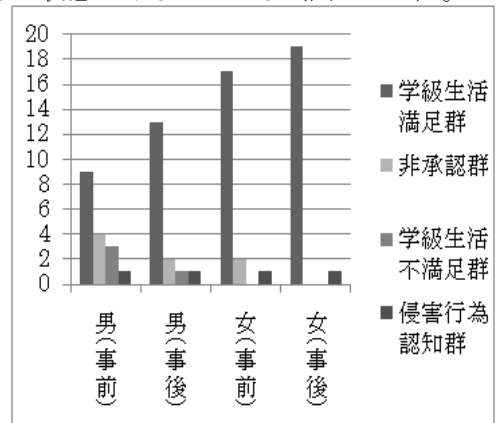


図4 事前・事後の人数変化

6 振り返りカードについて

児童には毎回授業の終わりに振り返りカードで、満足度（学習は楽しかったか）、理解度（学習内容はよくわかったか）、活用度（学習内容をこれからの生活に役立てたいか）の3項目を4段階評定で自己評価させた。プログラム全体の平均は、満足度3.75、理解度3.98、活用度3.97であった。3項目とも高い数値を示していることから、児童にとっては有意義なプログラムであったと考えられる。特に、理解度と活用度の平均値が高い。これは、資料の場面設定が、児童にとって身近なもので、興味を抱きやすく、これからの生活に生かそうとする意欲に結びついたのではないかと考える。実際に、感想欄には、「今まで、授業中、先生の話に反応しないことがあったのでしっかり反応したい。」「友達に誘われて断れず、きまりを守れないことがあったので、悪いと思ったことは相手に理由を話して、断るようにしたい。」など、児童自身の今まで

の行いの振り返りやこれからの生活にどのように生かしていきたいのかなどを具体的に書いている児童が多く見られた。モラルスキルトレーニング・プログラムによって身に付けたことを確認し、実践に結び付けようとする意欲が感じられた。

しかし、検定の結果、1回目のプログラム以後、満足度の平均値が理解度・活用度の平均値よりも低く有意差が認められた。これは、満足度を「楽しかったか」という観点で測ったことが原因であり、児童は、「楽しさ」＝「笑い」と捉えたためではないかと考える。

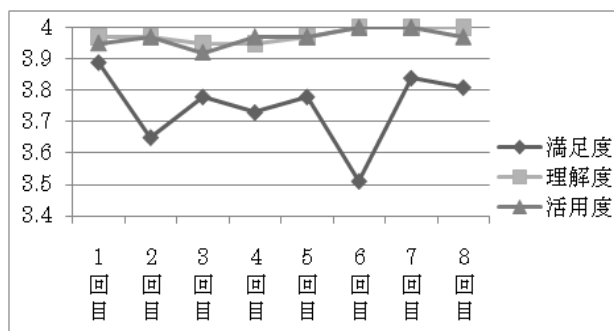


図5 授業後のアンケート平均値の推移

7 担任から見た児童の変容

プログラム終了後、協力学級の担任から聞いた児童の変容について、以下に記載する。

- ・様々な学習場面や生活場面において、自分だけがしっかりやっていたらよいという雰囲気ではなく、他者の間違っただけの言動には注意をし、よりよい学級・学校にしようという意識が感じられるようになった。
- ・以前より話の聞き方が良くなり、授業に集中して取り組む姿が見られるようになった。
- ・幼く、人に流されがちだった男子が、自分の考えを主張できるようになってきた。
- ・宿題忘れの多かった子が宿題をやってくるようになった。
- ・友達の言葉や行動に対してきついものの言い方をしていた児童が、相手の気持ちを考えて優しく話しかけている姿が見られるようになった。

上記の学級担任の感想から、事後調査の数値的な向上だけでは見えない児童の変容を伺い知ることができると考えられる。また、児童の「振り返りカード」で見られた活用度の高い数値は、具体的な行動としてプログラム後の学校生活に表れている。これは、プログラムだけの成果ではなく、授業で使ったスキルのポイントを教室内に掲示したり、授業で学んだことを日々声かけをしたりと、授業後にその意欲を持続させ、学校生活の中で実践できるよう指導した担任の力も大きい。そういった意味では今回のプログラムは、今までの自分たちを見つめ直し、身に付いていなかった技能を身に付けるよいきっかけになったといえる。

V 研究のまとめ

本研究では、小学校高学年の児童に対し規範意識を高めることを目的としたモラルスキルトレーニング・プログラムを実践することが、規範意識の低さが起因となる学級崩壊の予防に有効であるかどうかを検証した。その結果、

- ・「社会的責任目標尺度」の得点の平均値を検定した結果、有意差が認められ、規範意識と社会的、対人的な協力や援助の意識の向上に効果がみられた。
- ・「授業に関する規範意識尺度」の得点の平均値を検定した結果、有意差が認められ、授業中の規範意識の向上に効果がみられた。
- ・「学級の健康度」の得点の平均値を検定した結果、有意差が認められ、事前調査時よりも授業がうまく機能する状況になっていることが確かめられた。
- ・「学級満足度尺度」においては、「承認得点」と「被侵害得点」の平均値を検定した結果、ともに有意差が認められた。学級の状態としては、事前調査時よりもさらに規範とリレーションの確立した親和的な学級集団へと向上しており学級崩壊の兆候はみられなかった。

以上のことから、モラルスキルトレーニング・プログラムを実践することで、学校生活や学習において規範意識が向上することが明らかになった。また、学級の状態もよりよい変容がみられたことから、規範意識の低さが起因となる学級崩壊の予防には効果があると考えられる。

本研究では、協力学級の児童の規範意識が事前調査の時点で高い数値を示し、その児童の実態に合わせたプログラムを作成し実践した。規範意識が低い学級に対しても、児童の実態に合わせ、具体的な育ちの姿を想定したプログラムを作成し実践することで効果があると考えられる。

VI 本研究における課題

- 1 規範意識は、規範の価値や意義を理解し、規範に則った行為を体験したり、振り返ったりしながら長い時間をかけて向上していくものである。今回のプログラムは、短期間で集中して実施したものであり、規範意識の向上はみられたが、一時的なものであることも考えられる。モラルスキルトレーニングによって向上した規範意識を定着させ、一般化を図るためには、学級の実態に応じたモラルスキルトレーニングのプログラムを作成し、道徳や学級活動の年間指導計画に取り入れ、教育活動全体を通じて計画的・長期的に実施することが必要であると考えられる。
- 2 授業後のアンケート作成の際、何を測るのかねらいを明確にし、質問項目を十分に吟味する必要がある。また、児童が質問の意図をしっかりと理解できるように説明する必要がある。

<引用文献>

- 文部科学省 2007 『平成19年度 文部科学白書』, p22
河村茂雄 2008 『データが語る②子どもの実態』, pp. 24-26, 図書文化
堀越清次 1996 「中学生の規範意識に関する研究 ―生徒の認知する教師の指導態度との関連を中心に―」, p5, 上越教育大学大学院 修士論文
中谷素之著 2006 『社会的責任目標と学業達成過程』, p. 26, 風間書房
林泰成編著 2008 『小学校 道徳授業で仲間づくり・クラスづくりモラルスキルトレーニングプログラム』, p7, 明治図書出版社

<引用URL>

- 文部省 2000 「文部省委嘱研究(平成10・11年度)学級経営の充実に関する調査研究(最終報告書)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad200001/hpad200001_2_043.html (2009. 12. 15)
埼玉県教育委員会 2008 「平成19年度 学級がうまく機能しない状況に関する調査結果」
http://www.pref.saitama.lg.jp/A20/B100/H19_gakkyuu.pdf (2009. 12. 15)
内閣府 2007 「低年齢少年の生活と意識に関する調査」
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei2/zenbun/index.html> (2009. 11. 25)
文部科学省 2006 「児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/05/06052417/001/002.htm (2009. 12. 22)
小松郁夫 2003 「小学校における学級の機能変容と再生過程に関する総合的研究(最終報告)」
<http://www.nier.go.jp/ikuo/achievement/gakkyunokinouhenyou.pdf> (2009. 12. 22)

<参考文献>

- 堀洋道監修 櫻井茂男 松井豊編 2007 『心理測定尺度集IV 子どもの発達を支える 〈対人関係・適応〉』 サイエンス社
國分康孝監修 小林正幸 相川充編集 2001 『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校 楽しく身に付く学級生活の基礎・基本』 図書文化